

園児のときから、無農薬・循環型の本物農業体験を 小学生、大人にも広げ、教育ファームで市民交流をめざす

3年目となる北杜市の教育ファームのメインステージは五つの保育園。園内に10坪菜園をつくり、土の感触、野菜の成長力に毎日触れることで、子どもたちははつきりと変化していく。指導するのは若手生産者。こちらも、「教えることで、勉強になります!」。大人のための教育ファームもスタート、さらに今後は小学生にも広げ、農を通じての市民交流はますます盛んに、定住と子育てに最高のまちを全国に発信していく。

北杜市役所 産業観光部 食と農の杜づくり課

取組主体

- 名称：山梨県北杜市役所 産業観光部 食と農の杜づくり課
- 担当窓口
担当課(者)：浅川 裕介
住所：山梨県北杜市須玉町大豆生田961-1
電話・FAX：0551-42-1354
E-mail：asakawa-yuu@city.hokuto.lg.jp
- 団体等の属性：市町村
- 活動内容を紹介するHPアドレス：<http://ameblo.jp/syoku-no-genten/>
- 連携団体及び協力団体
属性：農林漁業者、農林漁業に関する団体、学校(保育園)
内訳：JA梨北、(農)白州鳥原平



北杜市の教育ファーム田んぼ

取組地域及び地域の特徴

取組地域：山梨県北杜市

地域の特徴：

北杜市は、八ヶ岳、甲斐駒ヶ岳、^{みずがきやま}瑞牆山をはじめ、日本を代表する百名山に囲まれ、日本一の日照時間と、ミネラルウォーターの生産量日本一という清らかで豊かな水資源に恵まれている。このような豊かな自然から育まれた「梨北米」が、日本穀物検定協会主催の食味ランキングで5年連続「特A」を受賞し、平成20年産については「日本一おいしいお米」の称号をいただいた地域である。また、豊かな自然資源に惹かれ、農薬や化学肥料を使用しない有機農業を志す若者が、就農の地として毎年数多く訪れる。

取組内容

(1)目的(目標)

市の将来像「人と自然と文化が躍動する環境創造都市」に向け、人は、生まれ育った環境と密接な関係になり、その地域でとれたものを食べるのが体にもっとも良いという考えである「^{しんどふじ}身土不二」を重んじ、「人」「自然」「文化」の3つをテーマに、「生きる力」を養う本物体験事業としている。

「人」

生産者と消費者、親と子、世代を超えた触れ合いなどから、人と人の「絆」、市民の絆を保ちつづけ、助け合い精神のある子どもたちを育成する。

「自然」

土、生き物、^{もり}杜などあらゆる自然資源と触れ合い、自然の力に感謝し、自然を大切に思う心を養い、心豊

かな子どもたちを育成する。

「文化」

歴史、風習など北杜市の郷土に伝わる文化に触れ、先人の知恵を学び、そして北杜市を誇りに思う子どもたちを育成する。

(2)取組開始時期・経緯：平成20年4月1日

(3)対象作物

米、野菜

作物名・種類：

選定理由：好き嫌いをなくすという意味も込めて、子どもたちにできるだけ多くの種類の野菜に触れさせたい。

(4)具体的な取組内容

●ニワトリ見学について

保育園の教育ファームでは、自然の恵みのみで栽培（有機農業への挑戦）を行なっている。栽培に当たり主に鶏糞を使用することが多く、鶏糞がどのようにできるのか、ニワトリの食べものから普段自分たちが食べているものへの関心を高めるとともに、生き物と触れ合うことで「いのち」の尊さや「いのちの循環」を感覚的に伝える。



ニワトリあったかい！

●バターづくりについて

身近な食材で手軽にできる加工品の素材として、「清里ミルクプラント」のノンホモ牛乳を活用したバターづくり教室を開催。1リットルの牛乳から35gのバターしかできないという貴重性も学ぶことができ、食べ残しをしないなどの「もったいない」につながることも目的とする。

(5)年間スケジュール

平成23年度より毎月2日「畑の日」を設置してもらう。

※「畑の日」とは、雨天時予備も含め、本物のお百姓さんが畑の指導に当たる日をいう。

(夏野菜)

4月	ジャガイモ定植・ニンジン播種
5月	トウモロコシ播種・インゲン播種・ピーマン定植・ナス定植・スイカ定植
6月	オクラ播種・キュウリ定植・トマト定植
7月	畑の見学・バターづくり

(秋野菜)

8月	大根播種・ほうれん草播種
9月	キャベツ・ブロッコリー・カリフラワー 定植
10月	ニワトリ見学ツアー・バターづくり
11月	タマネギ定植(保育園畑にゆとりのあるところ)
12月	畑の片付け(終了)

※この他に、一般公募による親子の教育ファームも実施

(6)参加者数・属性の実績及び推移

平成20年度 スポーツ少年団対象200名親子

平成21年度 一般公募による20世帯

平成22年度 一般公募による20世帯

市内保育園5ヶ所

※平成22年度は、山梨大学との連携により別に効果測定実施。

(7)経費

平成20年度 平成21年度 約100万円

平成22年度 農業者指導料 保育園1ヶ所5万円×5ヶ所=25万円

小学生圃場指導・管理料一式 50万円

教育ファームサポーター賃金 20万円

その他必要資材等 20万円



プールじゃないよ田んぼだよ

課題及び対処方法(ポイント・工夫)等

●関係者(団体)との連携の経緯

2004年に7町村の合併によって北杜市が誕生したあと、地域農業の核となる農業者育成を法人化して進めるなか、白州地域の農業者から、都市部の子どもたちを対象とした農業体験の情報を得た。また同時期、地元小学校を対象に地産地消給食会を開催し、子どもたちから、野菜の農業問題、地産地消による地域活性化などの質問が出され、この地において子どもたちの視点からの農業体験を実施することとなった。

●連携を進めるに当たっての課題と対処方法(ポイント・工夫)

初年度は、ただ単に人を集めた体験事業を行なったが、果たして本当に子どもたちに「食」や「農」の大切さを伝えられているのだろうか? という疑問が残った。2年目、一般公募で参加者を募ったがなかなか前に進まない。3年目となる22年度は、小学校に上がる前の子どもたちに目を向け、保育園における教育ファームに力を入れた。子どもの大切ないのちを預かる保育園側とすれば、園の外に畑があると毎日の管理に責任が持てない。事務局としては、野菜の成長はものすごい力、毎日接することで愛着も湧くし、日頃から管理をしてもらいたい。そこで、保育園の中に10坪ほどの畑を設置し、市内で農業を頑張っている若手支援農家を指導者に迎え、保育園児が無農薬・無化学肥料による栽培を進めている。感受性豊かな年代だけあって、極力裸足での体験を保育園側に要望。昔の裸足保育を復活させようとしている。子どもは、土の感触から、「冷たい」「温かい」「硬い」「柔らかい」など楽しんでいる。

今後は、小学生の教育ファームに広げていくことが課題。22年度は大人の教育ファームもスタートしているから、次年度以降はあらゆる世代を一緒にして地域内の「絆」(市民同士の交流)を深めるような農業体験に。また、都市部からの体験を受け入れてほしいという声もあるので、都市農村交流、2地域居住、そして定住促進につながるよう、子育ての環境に最高の場所である北杜市を全国に発信していきたい。

●コーディネーターの存在：食と農の杜づくり課



園舎のまん前の畑でみんな裸足!

●ほ場での運営の課題と対処方法

農業の担い手はどんどん高齢化している。今年度も畑の担当者が急に体調を崩したりしたとき、農場の除草対策など課題が残った。今後も、高齢化によるこのような問題は起こりうるので、早急な対策が必要。地

域の農業大学校、また今年度から、産学官連携により山梨大学に通う教員の卵の方たちも体験に参加するようになっていたため、農家から学生に、学生から子どもたちに指導できるマニュアルも検討していきたい。

●安全管理

刃物などを使用する際は動きを中断して、子どもたち一人ひとりが落ち着いて作業できるように指導を心掛けている。

これまでの成果

特に保育園の教育ファームにおいては、自分で栽培することにより、嫌いな野菜を食べられるようになったという意見を多くいただいている。また、虫に対する見方が変わってきていることも実感する。

今後の構想、課題

全保育園の園内に畑が設置できるような体制づくりを行ない、そこから収穫した野菜で保育園の給食ができるサイクルをさらに広げていきたい。豊かな自然資源によって成長する地域の農産物をたくさん食べることで、感動の心を養い、ふるさとに誇りを持つ子どもたちが育成できればと願う。



農家のお兄さんと一緒に畝立て

みんなのコメント集

取組の 実践者

- ・農業の実際は最近注目されているほど明るいわけではありません。でも教育ファームのような取組みは、農家にとってとても励みになります。非常にパワーをもらえます。
- ・子どもたちとの交流は、消費者にわかりやすくものを伝えるという点でも勉強になります。農家が当たり前のようになってしまう専門用語は一般の方にはわからない。それに気づかされるというか、逆に教えられることが多いですね。

参加者

保護者・保育園の先生

- ・圧倒的に好き嫌いがなくなります。
- ・動物や昆虫だけでなく野菜たちも生きているんだなあ。
- ・子どもたちがおばあちゃんの畑仕事を手伝うようになりました。



種ちようだ〜い!

※巻頭の取材記事(1頁)もあわせてご覧ください。